

六波羅蜜寺旧境内の調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

六波羅蜜寺は、応和3年(963)空也上人が亡くなった人を供養するため六波羅に西光寺を建立したことに始まります。西光寺は上人没後、弟子の中信が堂舎を整え、六波羅蜜寺と名を改めました。平安時代後期には平氏一門が、この地の周辺に六波羅邸を築いて大いに栄えたことは『平家物語』でも有名です。壇ノ浦の合戦で平氏滅亡後は、源頼朝が邸宅をかまえ、承久の乱(1221)後には北条氏が六波羅政庁(探題)を設けました。その間、六波羅蜜寺はたびたび火災に遭い、現在の本堂は鎌倉時代に建て替えられたものです。

この六波羅蜜寺に隣接している



写真1 東の調査区で見つかった門跡(南から)

元六原小学校校内で2011年に発掘調査を実施しました。六波羅は山城国愛宕郡鳥部郷三条野振里に位置します。鳥部野(鳥辺野、鳥戸野)は西の化野、北の蓮台野とともに

古くからの葬送の地でした。六波羅の地名は「髑髏原」や「麓原」に由来したものとされています。

調査は、東西に2箇所の調査区を設けて実施し、室町時代の遺構



写真2 西の調査区(北から)

を多く確認しました。

東の調査区では、礎石を据えた門(写真1)と門に取り付く東西方向の築地、同じく東西方向の溝があります。門は左右それぞれ礎石を3個据え、中央が親柱、前後が支柱となります。幅は1.5mで人が一人通れるくらいの小さな門で、六波羅蜜寺の北限にあたる北門と考えられます。

西の調査区では、自然地形の急な斜面を埋め立てて平坦面を造っていた様子がうかがえます。この平坦面の上で多くの遺構が見つかりました(写真2)。堀は断面がV字形で、深さ1.5mある「薬研堀やげんぼり」とよばれる防御用のものです。

堀は東に曲がって終わり、曲がった箇所には大きな石を3石据えていました。堀の東にあるたくさん

の柱穴からは建物や門、柵が復元できました。建物は東西2間(約1.8m) 南北2間(約4.8m)あり、南北に長い物見櫓ものみやぐらのような建物が考えられます。東辺の柱筋は布掘柱列とあって、溝状の土坑を掘り、底に礎石を据えたものです。建物の北には建物に取り付く脇門や柵1が南北に並びます。柵1より東にも平行して柵2があります。これらの遺構からは室町時代後期の遺物が出土しました。

この頃、天文法華てんぶんほっけの乱(1536年)が起こり、京都では多くの寺が焼き討ちにあいました。大火は町中におよび、応仁の乱を上回る被害でした。洛東の高台から洛中に入る炎や煙を見て、六波羅蜜寺もこのような防御施設を築いたのでしょうか。そのおかげでしょうか、

六波羅蜜寺の本堂は現在もそのままに残されています。

斜面を埋め立てた土や南北溝からは土師器に混じって大量の瓦器の鍋・羽釜・茶釜が出土しました(写真3)。鍋釜類の中には焼骨のかけらや焼けた大麦が混じていたものがあつたことから、蔵骨器として使用されていたことがわかりました。六波羅蜜寺境内の西側はお墓であったと考えられます。堀などを造る際に壊されてしまったのでしょうか。

堀の西では平安時代前期の墓地と考えられる土坑を見つけています。土坑は東西0.4m・南北0.9mの小さなもので、灰釉の壺と土坑の周縁に木目跡がついた錆びた鉄釘が数本出土しました。墓に埋葬された木棺に使用された釘と考えられます。また、室町時代の遺物に混じって古墳時代の円筒埴輪の破片も出土しています。このことから六波羅は平安時代以前から葬送の地であったことがわかりました。

平安時代、六波羅蜜寺の北は五条大路(現在の松原通)の東延長の道が珍皇寺、清水寺への参詣路として民衆が集まる場所でした。ここに空也上人が西光寺を建立したのもこのような理由があつたからだと思われます。

今も8月7日から10日は、珍皇寺や六波羅蜜寺は大勢の人で賑わいます。「あの世」から「この世」に帰って来る精霊を迎えるためです。平安時代から続く「六道まいり」や「萬燈会」が今も脈々と受け継がれているのです。(田中利津子)



写真3 溝からの出土状況(上)と出土した瓦器の羽釜(左)・茶釜(右)